

よく出てくる言い回しに慣れる

右の古文書は、「願書」と呼ばれる史料に頻出するタイトルです。「乍恐以書付奉願上候」と書いてあります。漢文でいう一二点やレ点を書いてありませんが、「恐れ乍ら書付を以願上奉候」と読みます。似たパターンで「乍恐以口上書奉申上候御事」などもあります(おそれながら こうじょうがき をもって もうしあげ たてまつりそうろう おんこと)。「読み」は「意味」なりで、読めれば意味もわかります。



次は左の古文書です。最初の3文字は「相冊宛」と読みます。ここは今日のポイントではありませんので、省略します。その次の「**マ**」が「可」で、これは記号のようなものだと理解した方が早いかもしれません。

おは前回出てきた「相」。**渡**は**し**が「**い**」でしょう。

度が**度**という感じで書いてあるのですが、これは「度」という字です(こ

れも頻出します)。「**い**」に「度」で「渡」。**置**は難しい崩しですが「置」

です。**旨**は**上**が「上」「ヒ」?、**日**が「日」「同」「月」?ですから、

組み合わせると「旨」?となります。しかし、この場合、実は1文字1文字を解読する必要はありません。「可相渡し置可き旨」という一つながりの言葉です。「置」はなくて「可相渡し置可き旨」というときもよくあります。英語で言うイディオム(熟語)のようなものです。

右は、「可相渡し置可き旨」の続きに書いてあった古文書です。これも1

文字ずつ(一応)やれば、**被**は「被」、**為**は「為」(これは何となくイ

メージが沸くかもしれませんが)、**仰**は「仰」、**付**は「付」(これも

イメージできるか)、**候**は「候」です。まとめると「被為仰付候」で「**お**せ**つ**け**な**され候」とよみます。途中の「被」を「られ」と読みます。もし「為」が入ってなければ「被仰付候」で、これは「おおせつけられそうろう」となります。意味は微妙に(?)異なり、「被為仰付候」は「(偉い人が)おおせつけになられた」、

「被仰付候」は「(偉い人から)おおせつけられた」ということです。なお、右の文書をよく見ると「被為 仰付候」と一文字空いています。これは「**欠**字」といって「**仰**付」た偉い人に敬意を表しています。

「**欠**字」といって「**仰**付」た偉い人に敬意を表しています。

最後は力試し。上は今でも(?)使う慣用句です。**難**は「難」、**有**は「有」でレ点で返ります。正解は「難有仕合奉存候」。読むと「有り難き仕合わせに存じ奉り候」となります。

